

《研究ノート》

流通経済大学スポーツ健康科学部における 教育実習に関する調査報告 —2019年教育実習振り返りアンケートから—

松田 哲

Research report on educational training at RyutsuKeizai University

—Educational training review and questionnaire in 2019—

Tetsu MATSUDA

キーワード：スポーツ，教育実習，保健体育

Key Word : Sports, Educational training, Health and physical education

要旨

本調査は、流通経済大学スポーツ健康科学部で保健体育の教育実習生として実習を終了した学生を対象に、実習終了後のアンケートを集計し報告したものである。これまでも事後アンケートを実施してきたが、担当種目や担当単元が中心であったことから今回の調査では、「苦勞したこと」について授業編、生徒理解編・人間関係編・その他の4項目に分けて聞いている。授業編では、指導案の作成、授業の仕方や方法、教材研究が上位3項目、生徒理解・人間関係についての上位は、生徒との距離感の取り方について、生徒とのコミュニケーションの取り方、生徒への褒め方や叱り方となっている。また「今後大学で取り入れてほしい内容」についても調査項目に含めて、学部全体として共通理解を図る資料としたい。

1. はじめに

教育実習の位置づけは、文部科学省中央教育審議会答申による教職課程の質的水準の向上に明記されている。その中で「教育実習は、学校現場での教育実践を通じて、学生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会であり、今後

とも大きな役割が期待される。」としている¹⁾。そのために大学や実習校または教育委員会との連携強化を図る必要性が指摘されている。そもそも教育実習の歴史は古く、荒尾や千葉の研究(2014)によると、学制が始まった1872年(明治5)から1874年(明治7)にかけてほぼ全国学区毎に、計7校の官立の師範学校が設立さ

れ、それ以後明治10年代半ばに編成された公立（県立）師範学校では、「実地授業」として最終期（2年後期）に15週30時間の「実地授業」が課せられたと推定している。そして、この「実地授業」がその後、明治40年代にいたって「教育実習」が教職専門科目を総称する「教育科」の一つの学科目として誕生することになっている²⁾。学校制度が誕生した当初より、師範学校では長い時間をかけて「教育実習」（実地授業）を課してきたように、その重要性は早い段階で認識されていたことが分かる。

2. 教育実習の目的

本学の教育実習の目的は次のとおりである。「教育実習の目的は、既に大学内で学習した教職のための理論的な理解と認識を学校教育の現場において実地に実践するなかで、総合的、経験的に教育事象を体得し、その体験のなかで、望ましい自己の教師像を形成し（教師としての認識・自覚・態度を形成することによって教育者精神の把握、教育者として使命観などの自覚）他日、教師活動展開のための素地を育成することを意図するものである。」また教職課程の理念として、次のような人材を育成するために、学生一人ひとりの資質の向上を図ることを目的としている。

- (1) 教育現場に即した実践的指導ができる
- (2) 生徒との信頼関係を築くことができる
- (3) 分かりやすい授業が展開できる
- (4) 生徒の命を守ることができる

本学では、学部学科により中学校教諭一種免許状「社会」「保健体育」をはじめ、高等学校教諭一種免許状「地理歴史」「公民」「商業」「福祉」「情報」「保健体育」などの教員免許状

が取得できるが、今回は「保健体育」の免許取得予定者を対象に調査研究を行った。

3. 調査項目と概要

今年度の「保健体育」の教育実習実施者は82名（男性58名、女性24名）であったが、調査回答者（N）は77名（男性53名〈68.8%〉、女性24名〈31.2%〉）であった。当該アンケートは教育実習終了後、2週間以内を目安にWebで回答させたものである。調査項目は表1を参照。

4. 分析結果

1) 回答者の属性

回答者の属性は、性別は男性53名〈68.8%〉が女性24名〈31.2%〉であった。実習校は高校が49名（63.6%）、中学校21名（27.3%）、中高一貫校7名（9.1%）であった。実習期間は3週間が34名（44.7%）、4週間が42名（55.3%）であった。実習期間を実習校種別にみると、高校では3週間の実習が多く、中学校や中高一貫校では4週間の実習が多くなっている。（graph 1参照）さらに教育実習の時期は5～6月が65名（85.5%）最も多く、秋学期の実施者も5名（6.6%）となっている。

2) クラス担当学年と教科担当学年

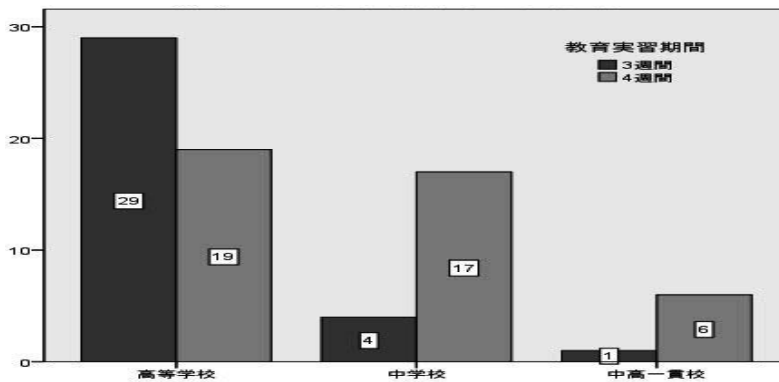
教育実習では、クラス担任に付いて学級経営やクラス運営なども学んでいくことになるが、中学校でも高校でも2学年が多くなっている。特に高校は2学年が24名（31.5%）と顕著である。また、どの学年であっても担当することが分かる。（graph 2参照）

保健体育は体育実技と保健に分かれ、教育実

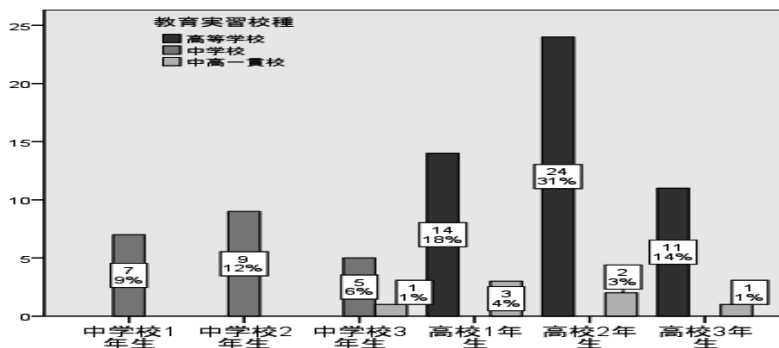
表1 調査項目

1 教育実習を実施した校種	15 高校保健で実施した単元
2 教育実習期間	16 高校保健で実施したその他の単元
3 教育実習時期	17 中学校保健体育以外の実施科目
4 クラス担任は何年生	18 高校保健体育以外の実施科目
5 体育実技の担当学年	19 本気で教師になりたいと思ったか
6 保健体育の担当学年	20 教育実習で苦労したことや上手くいかなかったこと(授業編)
7 体育実技の授業スタイル	21 教育実習で苦労したことや上手くいかなかったこと(生徒理解)
8 自分だけで授業を実施した回数	22 教育実習で苦労したことや上手くいかなかったこと(人間関係)
9 中学校体育実技で実施した単元	23 教育実習で苦労したことや上手くいかなかったこと(その他)
10 中学校体育実技で実施したその他の単元	24 大学の授業で取り入れたいこと
11 高校体育実技で実施した単元	25 その他教育実習に関してどんなことでも
12 高校体育実技で実施したその他の単元	26 性別
13 中学校保健で実施した単元	27 今年の教員採用試験受験の有無
14 中学校保健で実施したその他の単元	28 「受験する」場合の都道府県
	29 卒業後の講師希望

graph 1 教育実習校種別実習期間



graph 2 実習校種別クラス担当学年



習ではその両者について教壇実習を経験することが多い。ここでは複数のクラスを担当することから複数回答（MA）となる。まず体育実技であるが、高校では学年に関係なくどの学年であっても授業担当となることが分かる。中学校も同様である。中高一貫校の場合は中学校学年も高校学年も全学年に渡り授業を担当していることが分かる。（graph 3 参照）

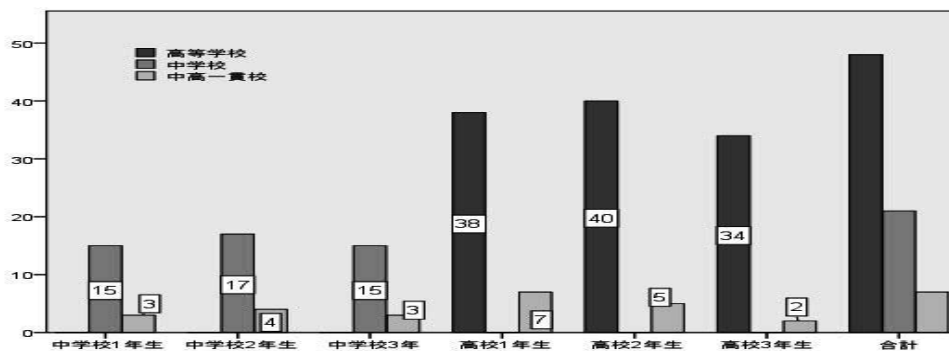
次に保健は中学校、高校ともに1～2学年が多くなっているが、中学校21名は高校56名に比べると保健を担当する機会は少ないのが分かる。中高一貫校でも中学校で3名に対して高校の学年9名と高校で多くの担当となっている。（graph 4 参照）

3) 体育実技の担当単元と保健の担当単元

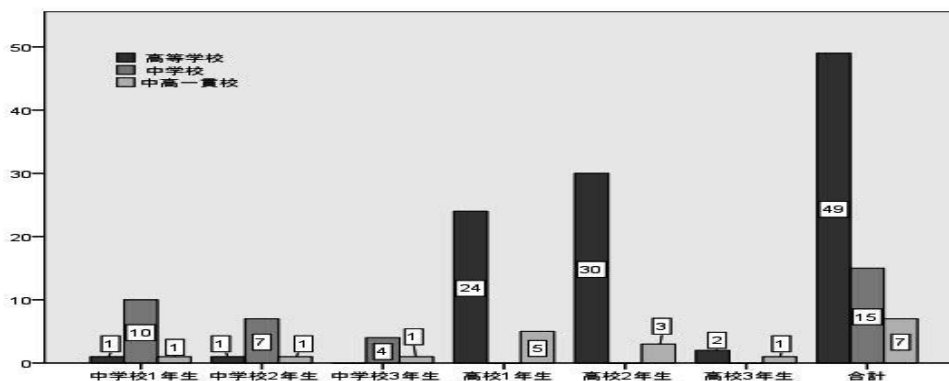
まず体育実技であるが、中学校では陸上競技だけで26名（33.3%）が授業を担当している。（ハードル10名、走り幅跳び9名、リレー4名、短距離2名、長距離1名）その他バレーボール7名（9.0%）、器械運動（マット運動）7名（9.0%）、体力テスト5名（6.4%）等の単元が多くなっている。当然時期が5～6月が多いことから、担当単元は時期によって異なってくる。（graph 5 参照）その他の項目では、集団行動1名、生涯スポーツ1名、プール掃除1名などが見られた。

次に高校の体育実技であるが、バレーボール31名（19.3%）、バスケットボール20

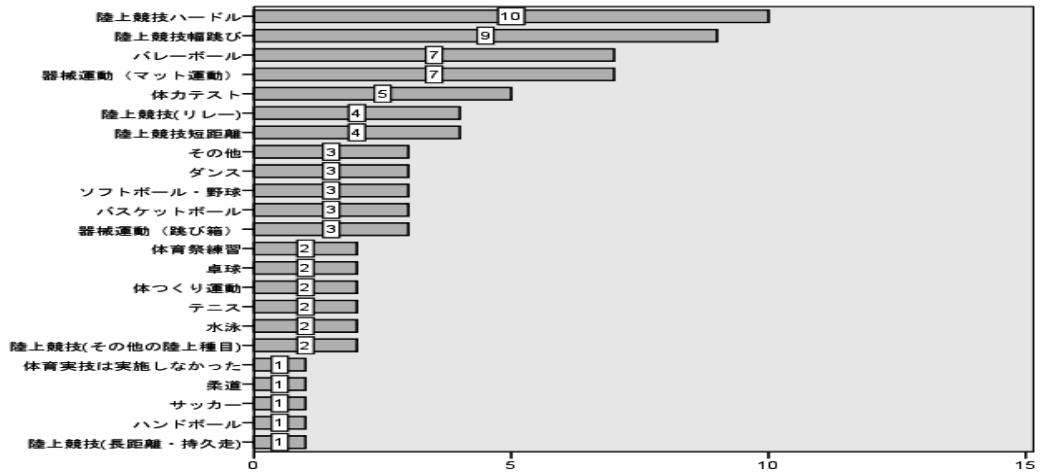
graph 3 実習学校種別体育実技担当学年（MA）



graph 4 実習学校種別保健担当学年



graph 5 中学校体育実技担当種目 (MA)

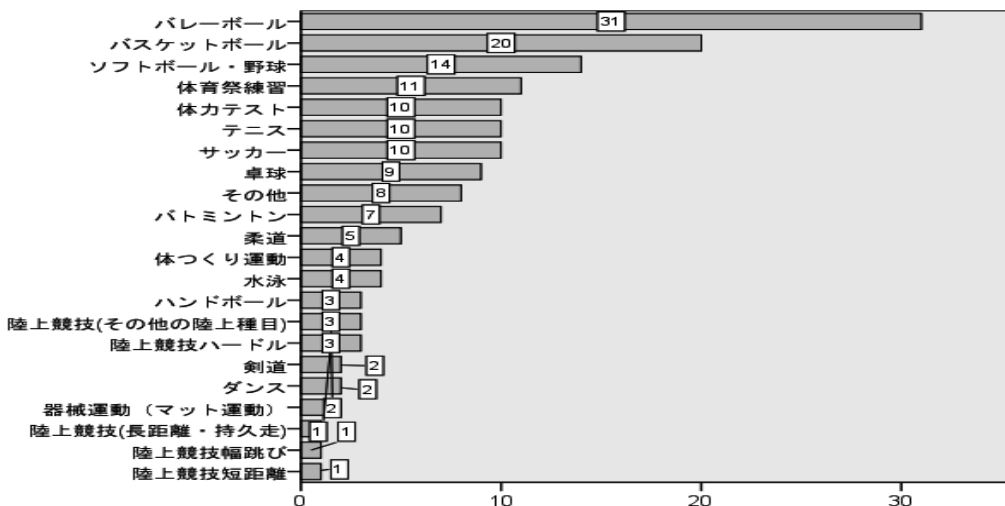


名(12.4%)が圧倒的に多く、次いで野球・ソフトボール14名(8.7%), 体育祭練習11名(6.8%), 体力テスト, テニス, サッカーが10名(6.2%)となっている。中学校に比べると柔道や剣道, バドミントンなど実習生の専門の種目を担当するケースも多くみられる。(graph 6 参照) その他の項目では, ドッチボール1名や新体操1名, 生涯スポーツ1名,

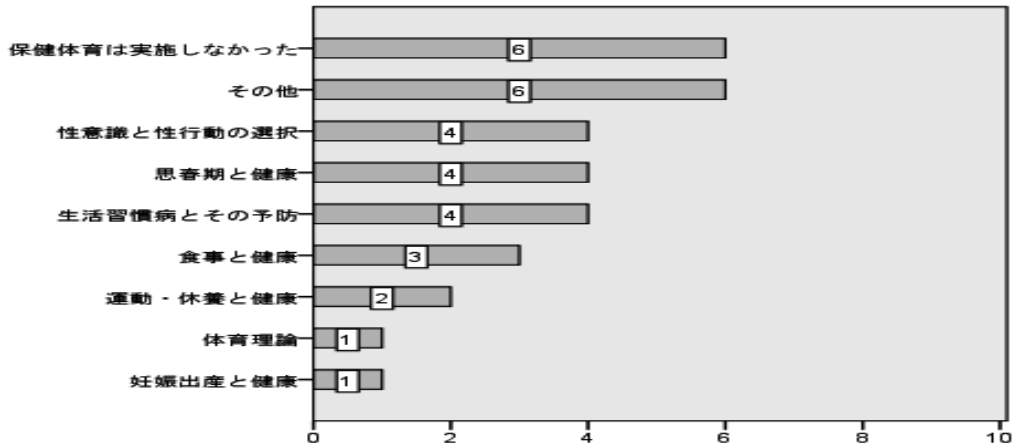
体育祭ダンス練習1名などが見られた。

続いて保健だが, 中学校は21名の実習生の内6名(28.6%)が保健の授業を担当していない。前述したように高校に比べると中学校では保健の担当が少なくなっている。(graph 6 参照) 一方高校は, 担当学年によって単元は変わるものの幅広く保健の単元を担当していることが分かる。(graph 7 参照) その他の項目では, 中

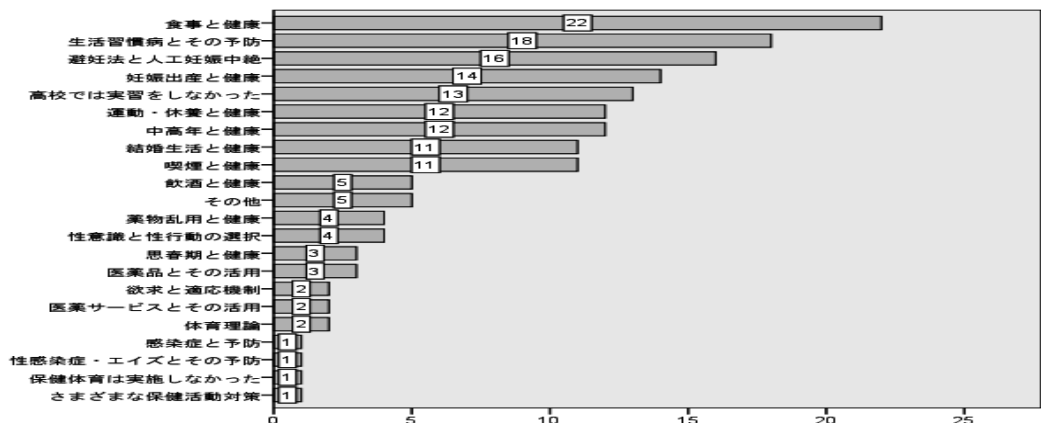
graph 6 高校体育実技担当種目 (MA)



graph 7 中学校保健担当単元 (MA)



graph 8 高校保健担当単元 (MA)



学校も高校もここに掲載されている単元以外の単元名が記載されていた。

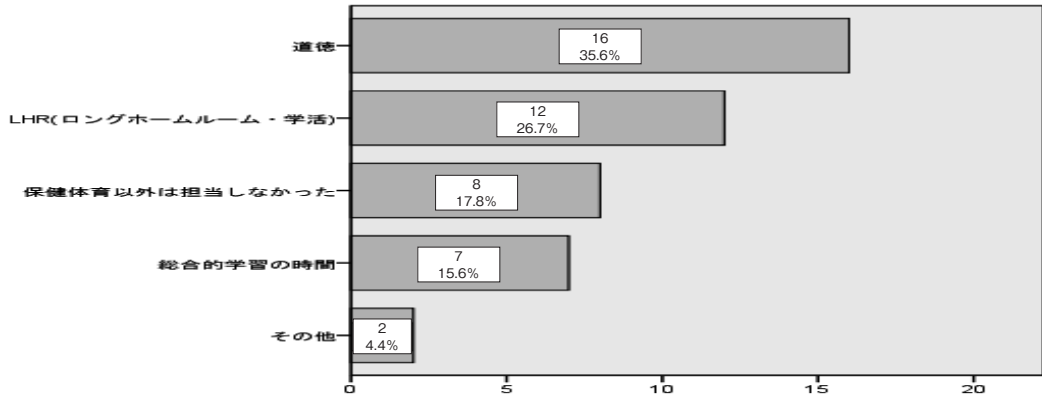
保健以外でどのような教科を担当していたのかを示したのがgraph 9とgraph10である。中学校では道徳16名(35.6%)が多く、次いでLHR12名(26.7%)、総合的学習の時間7名(15.6%)であった。大学の教職課程でも中学校免許状には「道徳教育論」が必修化されているが、教育実習では専門科目に限らずさらに道徳教育の教材研究や指導方法も必要になってくる。(graph 9 参照)

一方、高校ではLHR45名(60%)と最も多く、次いで総合的学習の時間18名(24%)となっている。高校では道徳2名(2.7%)は担当が少なくなっている。(graph10参照)その他の項目では、課題探求という生徒が学びたいことを探求する授業1名があげられていた。

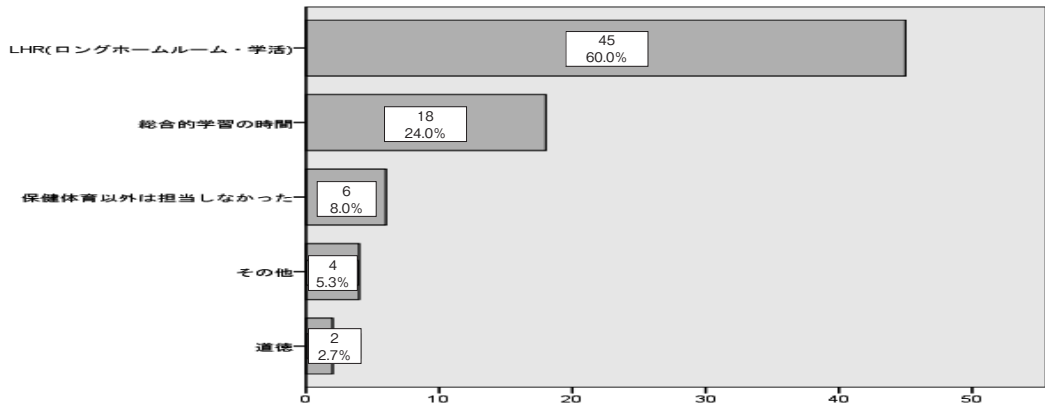
4) 苦勞したこと(授業編, 生徒理解・人間関係編, その他)

ここでは実習校種に限らず、教育実習で「苦勞をしたこと」について、授業編, 生徒理解・

graph 9 中学校保健体育以外の担当 (MA)



graph10 高校保健体育以外の担当 (MA)



人間関係編, その他に分けて複数回答で回答したものをまとめたものである。授業編では, 指導案の作成41名 (20.3%), 授業の仕方や方法31名 (15.3%), 教材研究30名 (14.9%) の上位3項目で100名 (49.5%) を超えている。続いて, 自分の専門外の種目25名 (12.4%), 笛の吹き方や整列の仕方21名 (10.4%), 運動能力に差があるクラスの指導14名 (6.9%), 安全面への配慮や立ち位置13名 (6.4%) となる。指導案作成は学校種や教科にかかわらず教育実習生にとって苦勞の種となっている。上位3つの

項目は教育現場や学校現場に則して学んでいく側面があることから, 教育実習で身につけるべきスキルともいえる。(graph11参照)

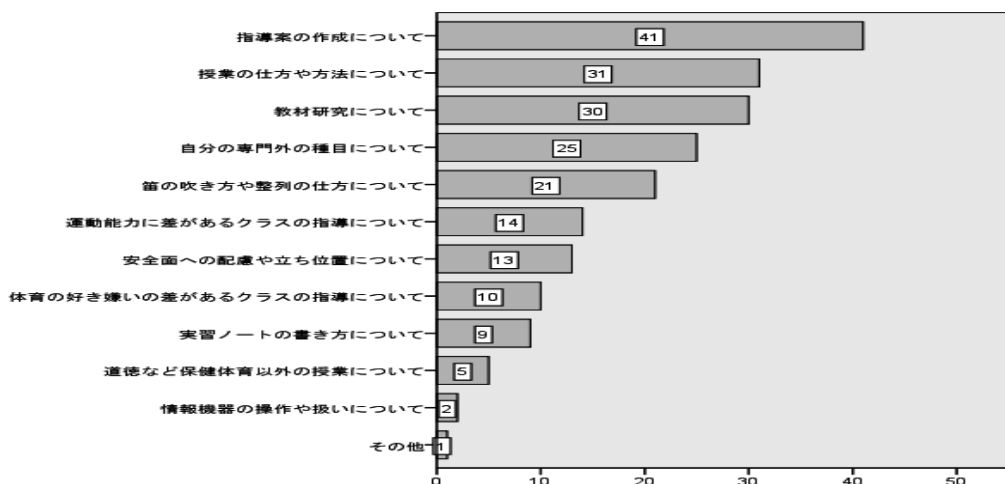
次に生徒理解・人間関係について苦勞したことについて回答したものである。上位なのは, 生徒との距離感の取り方について37名 (28.5%), 生徒とのコミュニケーションの取り方31名 (23.8%), 生徒への褒め方や叱り方24名 (18.5%) と上位3項目で90名 (69.2%) を超える。これらはいずれも生徒との関係についての課題である。事後報告でも最近「生徒と

の距離感の取り方」の難しさについて多数あげられている。続いての項目を見ると、他の先生とのコミュニケーションの取り方9名(6.9%)、指導教員との人間関係8名(6.2%)、他の実習生との関係4名(3.1%)と生徒以外の人間関係について苦勞したと感じているようである。また少数意見であるが、LGBTの生徒への対応2名や保護者への対応1名などがあげられていることも注目できる。(graph12参照)

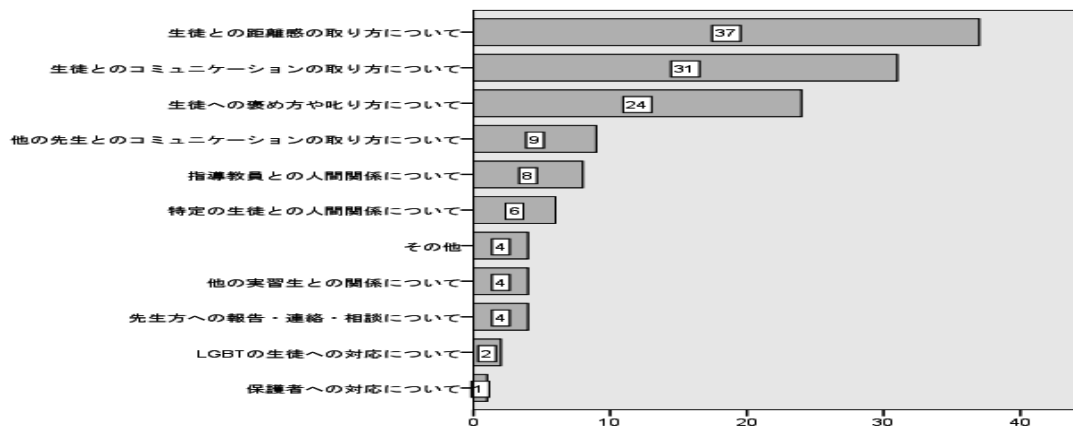
続いてその他の苦勞したことであるが、最も

多かったのは、睡眠時間の確保34名(35.4%)である。ここでも多くの回答項目を用意したが、回答があった項目のみグラフに記載した。この項目は自分自身についての項目だが、それ以外は、部活動の指導21名(21.9%)、アクティブラーニング19名(19.8%)、SNSの取り扱い9名(9.4%)、個人情報の扱い7名(7.3%)など、学校教育のなかでの項目が多数回答されている。ここでも少数意見であるが、実習中のセクハラ・パワハラ2名という回答が見られる。

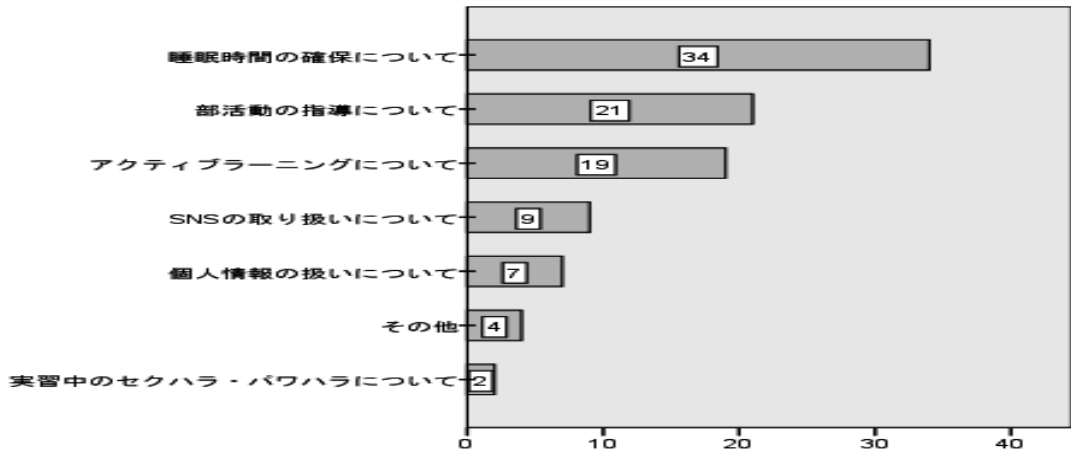
graph11 苦勞したこと：授業編 (MA)



graph12 苦勞したこと：生徒理解・人間関係編 (MA)



graph13 その他の苦勞したこと (MA)



(graph13参照)

5) 大学の授業で取り入れてほしい内容

ここでは、大学の授業で取り入れてほしい内容について複数回答で回答を求めた。上位の項目を見てみると、体育実技の指導案作成の機会を増やす51名(13.8%)、保健の指導案作成の機会を増やす41名(11.1%)、体育実技の模擬授業の学習機会を増やす34名(9.2%)、体育実技の教材研究についての学習機会を増やす28名(7.7%)、保健の模擬授業の学習機会を増やす26名(7.0%)、板書の仕方について学習機会を増やす23名(6.2%)、笛の吹き方や整列の仕方についての学習機会を増やす23名(6.2%)となっている。これらはいずれも保健体育の授業に対する内容となっている。特に体育実技に対する項目が上位に来ている。(graph14参照)

その他の内容として自由回答での記述を以下にまとめる。

- ・もっと、実践的な授業をした方がいいと思います。実技的な所では笛や整列の仕方、立ち位置などもある程度は大学で学んでおくべき

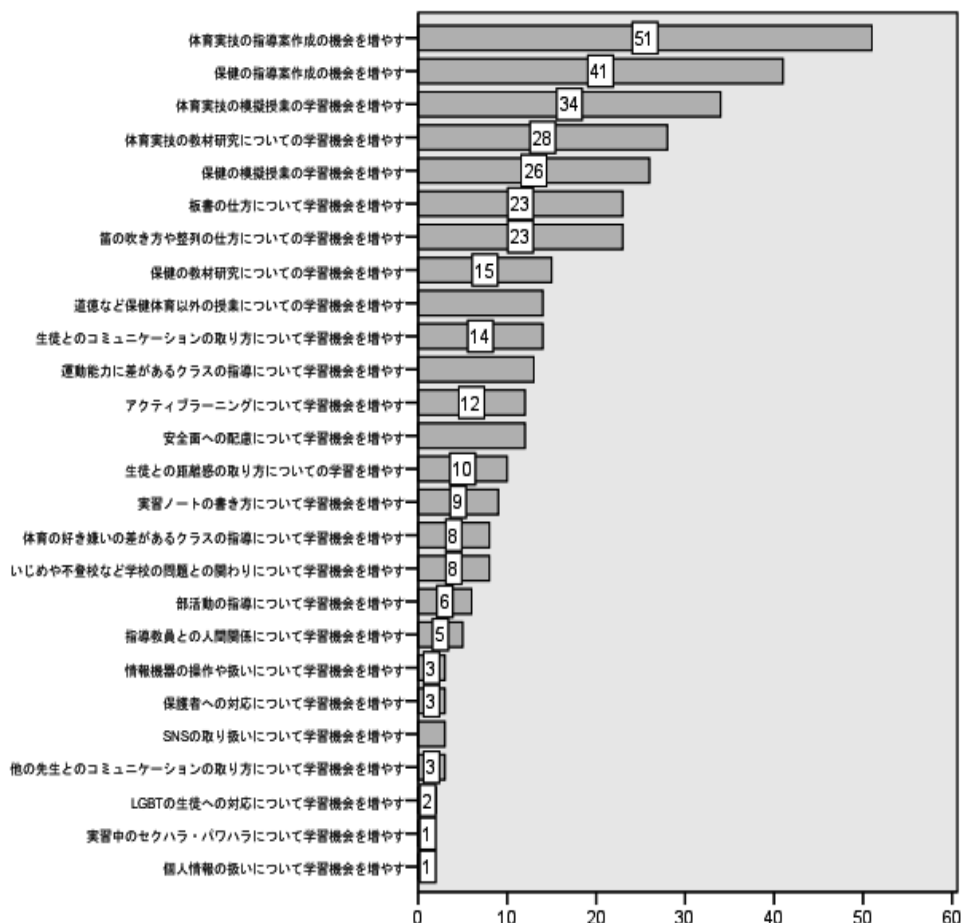
内容ではないのかなと思いました。

- ・臨機応変に対応する能力育成・中高生を相手にした模擬授業・道德教育の模擬授業
- ・模擬授業をする機会を増やす・特別支援学級についての理解をもっと深める授業
- ・自分の専門外のスポーツについての教材研究は、もっと行った方が良いと思う。自分で時間をとることが一般的に考えて当たり前だが、教員免許取得学生全体で、自分の専門外のスポーツについて追求する時間があれば、時間外での内的動機付けにもなると思った。
- ・生徒の効率的な指導(叱り方、褒め方など)方法について

6) 本気で教員になりたいと思ったか。その他教育実習で学んだこと(自由回答)

教育実習を終了した学生は、実習を通して本気で教員になろうと思ったのだろうか。なりたいたと思った34名(46.6%)とどちらかというとなりたいたと思った19名(26.0%)を合計すると72.6%の学生は本気で教員になろうと思ったということになる。これを今年の教員採用受験の

graph14 大学の授業で取り扱ってほしい内容 (MA)



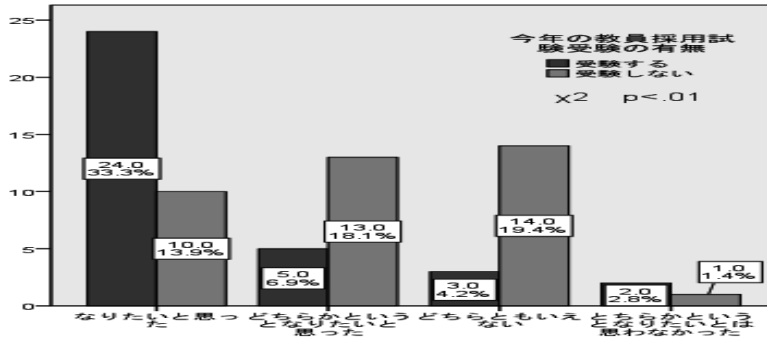
有無でクロス集計したものがgraph15であるが、どちらかというとなりたいとは思わなかった3名の内2名と、どちらともいえない17名の内3名は採用試験の受験者である。5～6月に集中する教育実習では、7月に実施する教員採用試験の手続きは教育実習前に終了する自治体が多くなっている。つまり、教育実習で教員になりたいと思ってから受験手続きは出来ないのである。またこの2つの項目の差について χ^2 検定を行った結果 $P<0.01$ で優位な関連性がみられた。教採を受験する実習生の方が「本気で教師にな

りたいと思う」傾向が強いということになる。

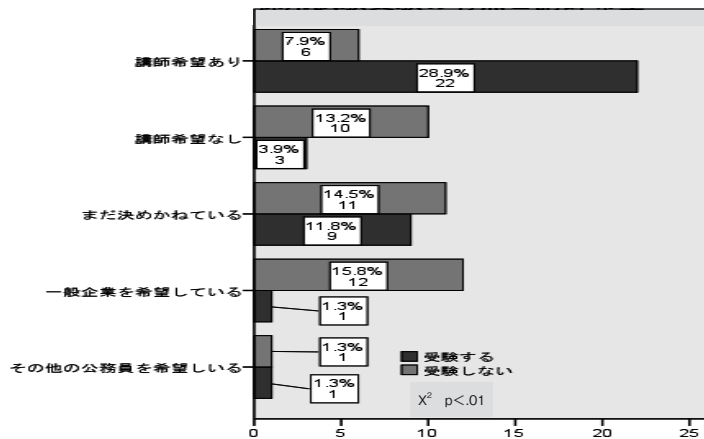
7) 教員採用試験受験者と卒業後の講師希望

今年度教員採用試験受験者は36名(47.4%)、受験しない実習生は40名(52.6%)と受験しない実習生が若干多くなっている。卒業後に講師を希望するかということについては、講師希望有28名(36.4%)、まだ決めかねている20名(26.0%)、講師の希望なし14名(18.2%)、一般企業希望13名(16.9%)、その他の公務員希望2名(2.6%)であった。まだ決めかねている実

graph15 本気で教師になりたいと思ったか (MA)



graph16 今年度の教員採用試験受験の有無と講師希望



習生を除くと、講師を希望しない実習生は29名(37.7%)と講師を希望する実習生より多くなっている。Graph16は教員採用試験受験の有無と卒業後の講師希望のクロス集計であるが、またこの2つの項目の差について χ^2 検定を行った結果P<0.01で優位な関連性がみられた。

8) その他教育実習に関してどんなことでも(自由回答)の結果

その他教育実習に関しての自由回答について主なものを以下に列挙する。

- ・指導教員でかなり教育実習の楽しさ辛さ大変さは左右すると教育実習を通して感じた。

- ・教員の素晴らしさをもっと理解することができた。
- ・自分自身成長していると感じることができました。
- ・生徒の素直さに不安なこともとれて前向きに頑張ろうと思えました。
- ・自分の一人称を変えるのが大変だった。
- ・先生方の活動や行動を1ヶ月間観察し、改めて本気で教師になりたいと思うことができた実習となりました。
- ・どれだけ苦しくても最後の生徒達との別れに味わうことのできる達成感は何ものにも変えられません。

- ・生徒達が目標を持っている限り、下を向かず学び続ける教師の姿勢が大切であることを学ぶことが出来ました。
- ・限られた時間の中でやるべき事が多く大変でしたが、教育現場を感じる事ができてとても良い経験になりました。
- ・教育実習に参加し、教師の大変さも学びましたが、教師という仕事のやりがいを感じる事ができました。
- ・実際に現場に出でて大学の授業は大学生を対象にしたものなので中学生の授業ではあまり役に立ちませんでした。難しいとは思いますが、中学生や高校生に授業をする機会を作れると実習に行った時に不安が少なくなると思いました。
- ・自分のことを「先生」と呼ぶのは正しいのか？と国語科の先生に投げかけられた実習生がいました。
- ・生徒との距離感のところで、色々な生徒がいる中で平等に接するという所が難しかった。特別学級の生徒が一般的なクラスで共学する難しさが教師側からの立場で見てとても難しさを感じた。
- ・とても充実していて楽しかったし教師になりたいと感じた。また教育実習に行きたい。
- ・大学で学んだ事は実際に現場で使える時と、全く使えないということがあったので、状況に応じた判断や行動が教育実習の3週間でついたと思います。
- ・一つ一つの授業を作る為にとても多くの時間がかかり、初めて教師という立場で授業を行うことの大変さがとても身に染みました。
- ・お世話になった先生方と共に仕事ができる喜びを味わい、後輩たちに自分が教わったことを自分の口から伝えられることが、こんなに

も幸せなことなのかと、楽しいことなのかと思った。「指導」することは何をとっても責任が伴う。責任は重いですが、それに見合うだけの努力をして、社会に立ちたい。

- ・自分たちが3年生の際にも実習後の感想・アドバイスを聞く機会が欲しかった。みんな指導案ばかりを問題視していたが採用後は学校の判断で指導方針が変わるため、指導案を理由にマイナスイメージが付く発言が多く、教員という仕事について学ぶべきだと感じた。
- ・実習を通して、行くまでは不安でいっぱいだったが終わってから感じた事は、常に楽しかったということ。一日一日がとても充実していて自分自身の成長を促すことができ、客観的に自分を見直す機会になったと思う。
- ・模擬授業の重要性がよくわかった。生徒を1番に考えること。
- ・生徒と、指導教員に恵まれ、とても良い実習になった実習を行わないとわからないこと、自分に足りないことを明確にすることができた

5. まとめと課題

これまでも教育実習終了後には、振り返りアンケートを実施してきたが、数値によるものではなかったため今回のようにgraphとしてまとめることはなかった。教員免許状の開放性を前提とした私立大学の教員養成課程では、課程履修学生が全員教員採用試験を目指し卒業後に教員を希望するわけではない。本学でも今年度教員採用試験受験者数は、受験しない実習生を下回っており、また卒業後の講師希望者も迷っている学生を除くと、講師を希望しない学生が多くなっている。そのような中でも72.6%の実習

生が、本気で教師になりたいと思った（「どちらかというとなりたい」を含む）ことから、教育実習の経験・体験は多くのことを実習生に考えさせるきっかけになっていることがうかがえる。

本学でも現在教育実習に送り出す学生の質の保証について議論を進めている。今後はそれらの質を客観的に捉え検証する必要がある。また本学の目指す教師像や目標に対し達成度を確かめる指標作りも今後の課題としてあげられる。

【引用文献】

- 1) 文部科学省中央教育審議会答申「教職課程の質的水準の向上」2006
- 2) 荒尾貞一, 千葉昌弘「一般大学・学部における教職課程教育の課題と実践（第3報）—「教育実習」に関する政策動向と実践的課題—」『北里大学一般教育紀要19』2014

【参考資料】

- ・流通経済大学教職課程「履修の手引き」2019
- ・江森一郎「体罰の社会史」新装版 新曜社 2013